

第4章

青梅市教育委員会の 学力向上に関わる取組について

I 青梅市教育委員会の学力向上に関わる取組について

青梅市教育委員会では、教育目標にある「自ら学びを考え行動する、個性と創造力豊かな人間」の育成および青梅市教育推進プラン（改訂版、平成23年3月）の柱2「社会のよき形成者となるために」の(3)自ら学び、自ら考える力を育成する、提言1「学力向上に向けた取組の推進」を踏まえ、次のような取組を行っている。

- 1 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の実施
児童・生徒の「確かな学力」の定着と伸長を図るために東京都教育委員会が実施している「児童・生徒の学力向上を図るための調査」を実施し、その分析結果を基に、学力向上施策の充実を図り、市内各小・中学校における授業改善を推進する。
- 2 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の報告書の作成
「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果の分析を行うことにより、課題を明らかにし、その解決策としての授業改善のポイントを示した。報告書を作成し、市内各小・中学校に配付し、学校における授業改善の具体的な取組を支援する。
- 3 「力だめしドリル」の作成
平成25年度から平成27年度の「全国学力・学習状況調査」の問題を再編集し、児童・生徒が問題の傾向に慣れること、各教科の平均正答率を上げることを目的に作成した。朝学習などで使用する市販のドリル等と同じように、A問題やB問題を朝学習等の短時間で扱うために、小学校第4学年、第5学年、中学校第1学年、第2学年の児童・生徒に配布した。
- 4 授業改善推進プランの作成・提出依頼
市内全小・中学校に対して、国や都の学力調査の結果や第1学期の児童・生徒の学習状況、評価の結果等を基にした「授業改善推進プラン」の作成を依頼し、提出を求めることで授業改善を推進している。
- 5 学力向上推進年間指導計画の作成・提出依頼
市内全小・中学校に対して、学力向上に関する課題解決に向けた年間計画の作成を依頼し、提出を求めることで、学力向上を推進している。
- 6 青梅市教育委員会研究指定校の設置
教育課程の実施に伴う学校の教育課題を焦点化し、実践的な教育活動についての研究を通し、特色ある学校教育の創造に向けた提言を市立各学校および保護者、地域に行う。このことによって、青梅市の学校教育の活性化を図るとともに教育水準を高め、開かれた学校づくりを推進する。
- 7 「学力向上推進委員会」の設置
青梅市の学力向上施策に関する検討を行う委員会（各小・中学校の代表、担当校長、副校長から構成）を設置することにより、青梅市教育委員会と学校との連携を強化する。
- 8 学校訪問の実施
教育委員会訪問や指導室訪問等を通して各校の授業改善の取組状況を確認するとともに指導・助言を行う。
- 9 小・中学校教育研究発表会の開催
青梅市立小・中学校の個人、団体等において推進する研究の成果を発表し、本市の学校教育の充実・向上を図ることを目的とする。平成27年度より、東京都教育委員会による「学力ステップアップ推進地域指定事業」の地域指定を受け、教育研究発表会では、小・中学校より1校、本事業の実践報告を行い、基礎学力の定着を推進する。

平成27年度 青梅市教育委員会 学力向上5カ年計画

施策等	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	目標
家庭学習の定着および充実	児童・生徒向けの啓発資料の作成	児童・生徒、保護者への啓発資料の見直し、配布	配布 ↑	児童・生徒、保護者への啓発資料の見直し、配布	配布 ↑	東京都の平均正答率を上回る
習熟度クラスおよび少人数クラスの導入	新規導入校の検討	指導方法の工夫・改善	保護者・市民向け家庭学習講習会 ↑		各校ごとのPTA主催家庭学習の研修会 ↑	
放課後授業および土曜日授業の推進	・サタデースクール実施要領の策定 ・対象校の選定 第二中学校区 第三中学校区	2中学校区でモデル的試行 第1回実態調査・分析	6中学校区に拡大して実施	全市的に実施 第2回実態調査・分析	次期事業計画の策定 ↑	
都の学力向上関連事業の活用	学力パートナーシップ事業(第二中学校区)	↑	学力ステツプアップ推進地域指定	↑	学力ステツプアップ成果検証 ↑	
学力向上推進委員会による取組	学力調査の分析、授業改善策の提示(報告書を作成)	発表 成果検証、他校に活用			↑	
学力向上のための長期計画	5カ年計画の策定	施策ごとの細部調整	見直し	施策ごとの細部調整	次期計画の策定	
学校による学力向上推進計画の策定	計画案を学校に例示	学力向上推進計画の全校策定	学校訪問等における指導・助言	効果的な取組の他校への情報提供 学力向上推進計画の見直し	次期計画の策定	
全国学力調査等の市の平均正答率等公表	全国結果の公表(広報・HP)	分析結果を付してHP公表			↑	
	都結果の公表(HP)	学力向上推進委員会報告書のHP掲載			↑	

Ⅲ 学力向上推進委員会の取組

平成27年度 学力向上推進委員会について

1 目的

各校における学力向上策および具体的な授業改善策を踏まえ、青梅市としての学力向上に向けた取組について検討を進め提言する。

本年度の活動の重点は、課題解決をするために必要な「考える力」を育む授業づくりを具現化する手だてを検証する。

2 これまでの経緯

平成17年	平成18・19年度	平成20・21年度	平成22年度
・都学力調査の分析 ・分析結果のまとめ	・諸調査の分析 ・分析結果にもとづく授業改善事例の提示	・授業改善プランの検証結果の分析 ・授業による検証結果を経た授業改善事例の提示	・平成21年度までの授業改善事例の検証 ・新学習指導要領への対応(言語活動の充実)
平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
・基礎的・基本的な学力の定着に向けた指導資料の作成 ・教科ごとの授業実践による検証	・家庭学習のすすめ(保護者版)の作成 ・児童・生徒の実態に即した学力向上策の立案	・家庭学習のすすめ(児童・生徒版)の作成 ・学力調査における各教科の課題と問題の分析	・課題解決をするために必要な「考える力」を育む授業づくりを具現化する手だてを検証する。

3 平成27年度 学力向上推進委員会の取組

平成26年度の各校における「児童・生徒の学力向上を図るための調査(東京都)」の分析結果等を踏まえ、「主体的に学習し考える力」を育む授業づくりに向けた指導資料を作成する。

(1) 平成27年度 学力向上推進委員の構成について

- ・青梅市学力向上アドバイザー 東京女子体育大学常任理事・教授 田中 洋一先生
- ・担当校長2名(小学校1名、中学校1名) 担当副校長2名(小学校1名、中学校1名)
- ・学力向上推進委員(教員)28名
※各小・中学校長は1名を委員として推薦する。
※小学校3グループ、中学校2グループに編成し、それぞれのグループで「主体的に学習し考える力」を育む指導計画を作成し検証授業を行う。
※各校の学力向上推進委員は学力ステップアップ推進委員を兼ねる。

(2) 共通主題

「主体的に学習し考える力を育む授業づくり」～言語活動の視点で授業を工夫することを通して～

(3) 指導法の検討(検証授業と検証授業の分析)

< 検証授業の実施 >

- ・各推進委員の専門教科の指導計画の作成と検証授業を通して、指導法の有効性や課題を明らかにする。
- ・各推進委員は2学期から3学期の期間で、グループで検討した指導計画による授業を実施する。(※授業研究はグループで行う。)

< 検証授業の分析・考察 >

- ・検証授業を基に、設定した指導法(手だて)の有効性等について分析・考察し、グループによる実践をまとめる。

4 年間活動計画

	月・日（曜日）	主 な 内 容
1	5月26日（火）	東京女子体育大学常任理事・教授による講義等 ※1 第1回青梅市学力向上ステップアップ推進事業連絡協議会を兼ねる。
2	6月25日（木）	グループ毎に学習指導案を検討する等
3	9月4日（金）	グループ毎に学習指導案を検討する等 ※1 第2回青梅市学カステップアップ推進事業連絡協議会を兼ねる。
4	10月13日（火）	※2 研究授業1（小学校）
5	11月10日（火）	※2 研究授業2（中学校）
6	2月22日（月）	1年間のまとめ ※1 第3回青梅市学カステップアップ推進事業連絡協議会を兼ねる。

※1 第1回、第3回、第6回は青梅市学カステップアップ推進事業連絡協議会を兼ねる。

※2 学力向上推進委員全員が揃う研究授業は年2回を予定。各推進委員は、指導法の検討の過程で検証授業を1回は行う。その際、グループの推進委員は、授業を参観し協議を行う。（出張依頼は教育委員会が作成する。）

5 学力向上推進委員の構成について

- 青梅市学力向上アドバイザー 東京女子体育大学教授・常任理事 田中 洋一 先生
- 基礎学力定着アドバイザー 宇津木 順一 先生
元木 靖則 先生
- 学力向上推進委員会 担当校長 第七小学校長 中嶋 太
第七中学校長 石田 重久
- 学力向上推進委員会 担当副校長 第四小学校副校長 石井 松男
西中学校副校長 廣瀬 尊貴
- 学力向上推進委員会 推進委員

1	第一小学校	松村 友子	15	藤橋小学校	半田 広子
2	第二小学校	松井 優子	16	吹上小学校	村野 恵
3	第三小学校	鈴木 耐	17	東小学校	相山 善祈
4	第四小学校	村野 聡	18	第一中学校	蓑毛 晶
5	第五小学校	村瀬 真紀子	19	第二中学校	山下 慎司
6	第六小学校	岩崎 典子	20	第三中学校	池田 知子
7	第七小学校	武本 正明	21	西中学校	小林 めぐみ
8	成木小学校	小野 浩子	22	第六中学校	伊藤 有里
9	河辺小学校	佐藤 春奈	23	第七中学校	助川 美貴子
10	新町小学校	有泉 力	24	霞台中学校	小野寺 悠
11	霞台小学校	松川 靖弘	25	吹上中学校	山本 史郎
12	友田小学校	阿部 久仁子	26	新町中学校	溝辺 健
13	今井小学校	秋元 平良	27	泉中学校	米原 恵
14	若草小学校	蓮尾 幸枝	28	東中学校	田渕 克器

6 研究授業について（研究テーマ等）

<研究テーマ>

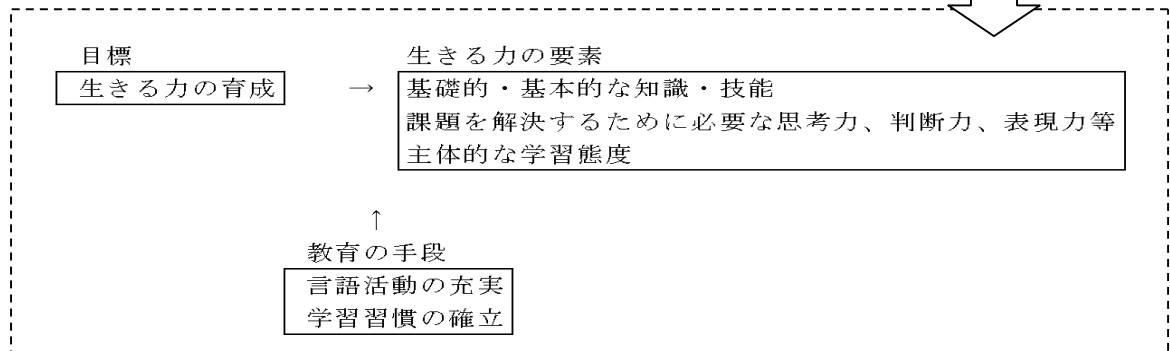
主体的に学習し考える子供を育む授業づくり

(1) 学習指導要領が求める学力（総則教育課程編成の一般方針）

※東京女子体育大学教授 田中洋一先生の資料より

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒（児童）に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒（児童）の発達の段階を考慮して、生徒（児童）の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒（児童）の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。 ※下線および網かけはアドバイザー

学習指導要領の各教科に言語活動を伴う学習が明記された

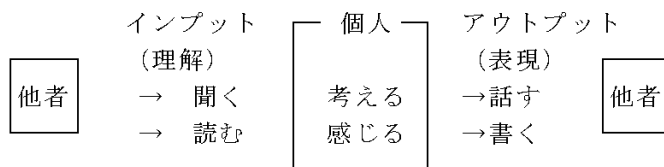


※「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」、「学習意欲」のバランスが大切であり、この3要素が相乗効果をもたらす。

(2) 言語のはたらき、「伝達」と「思考」について

言語のはたらき

「伝達」と「思考」



言語が伝え合う媒体であると同時に、「考える、感じる」際の道具となる。

「声を大きく」「相手の顔を見て」などは伝達の技術「話す内容をまとめて」「相手に分かりやすく」「説得力をもって」などは思考を伴う活動となる。

(3) 子供が主体の授業づくりについて

ア 学習の流れ

	『子供主体の授業』の展開例	具体的な指導例
導 入	<p>☆子供たちが見通しをもつ 課題を把握する</p> <p>学習課題をつかむ場面を設定した</p> <p>□子供たちは課題をつかんでいた。 □子供たちは解決の見通しをもつことができた。</p>	<p>○子供たちの関心・意欲を高めたり、不都合感を感じさせたりする問題を提示した。 ○子供たちが課題をつかんだタイミングで課題を板書した。 ○見通しについて、ペアで相談させたり、前で説明させたりして、既習内容を思い出させ、全ての子供に解決の見通しをもたせた。</p>
展 開	<p>☆子供たちが問題解決を図る</p> <p>一人で考える場面を設定した</p> <p>□子供たちは考えを書いたり、表したりしていた。</p> <p>☆子供たちの知識や考えを深める活動</p> <p>集団で交流する場面を設定した</p> <p>□子供たちは、自分の考えとその理由を伝えていた。 □子供たちは、学習課題を意識した発表や話し合いをしていた。</p>	<p>○子供たちが考える適切な時間を設定した。 ○机間指導を行い、個に応じた頑張り認め、適切な声かけができた。 ○必要に応じて、意図的に指名をした。 ○ペアで考えを伝え合う時間をつくる等、一人一人に考えを発表させた。 ○子供のノートをスクリーン等に映し出して前で発表させる等、学習のゴールを意識した発表をさせた。 ○発問の後に数秒の間をとって指名したり、ペアで話し合わせたりして、全員が考えを深められるようにした。</p>
終 末	<p>☆子供たちが学んだ知識や技能を振り返る(つかう)</p> <p>ふりかえる場面を設定した</p> <p>□子供たちは、学んだことを自分の言葉で書いたり、発表したりできた。 □子供たちは、学んだことを使うこと(確認問題等)ができた。</p>	<p>○授業の流れがわかる板書ができた。 ○課題を主語にして書かせる、キーワードを入れて書かせる等、まとめ方を工夫させた。 ○本時の学習を確かめる確認問題(宿題)等を出した。</p>

イ 子供たちに力を付けさせる授業の要素

【教師の視点】(※力とは、基礎的・基本的な知識および技能、思考力・判断力・表現力等)

- ・身に付けさせる「力」が明確になっている。
- ・「力」を付けさせるための手だてが準備されている。
- ・「教えて考えさせる指導」が行われている。
- ・「力」が付いたかどうか、適切に評価され、指導に活かされている。

ウ 子供たちにとって学びがいのある授業の構成要素

【子供の視点】（※学びがいのあるとは、学習意欲がわいてくる授業）

- 子供たち自身が、本授業によってどのような力が身に付き、実生活や実社会にどう生きるのか理解している。
- 学び方が分かる（主体的に「自分の考え」を記述するなど）
- 教材が魅力的である。
- 適度な難易度である。
- 頑張れば認めてもらえる。

(4) 教師の視点 観察シート

「力の付く授業」観察シート【教師の視点】

授業者	
-----	--

番号	項目	当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	子供に身に付ける「力」が明確になっている。	4	3	2	1
2	「力」付けるための手だてが準備されている。	4	3	2	1
3	「教えて考えさせる指導」が行われている。	4	3	2	1
4	「力」が付いたかどうか、適切に評価され、指導に生かされている。	4	3	2	1
5	先生の発話、学習形態、学習環境等によって、子供たちは主体性をもって学習に取り組んでいた。	4	3	2	1

自由記述欄(気付いた点とアドバイス)

○ねらいを最初から発表しないことで、子供たちがワクワクしていた。
 ○Cさんの記録、「代表に選ばれた理由」を考えさせたのはよかった。
 △子供の側にたったとき、本時でどれだけ「本時の学習の意味」を捉えることができたか、授業の最後にモヤモヤしていた。

【教科】 : から : まで参観

年 月 日 記入者

番号	☆『教師の視点』の具体項目
①	ねらいが焦点化されている。
1	導入段階で、身に付ける力と、その価値、学習活動の留意点を、子供の発達に応じて分かりやすく説明しているか。
1	本時のねらいに、身に付ける「力」が明記されている。
1	子供たちが、活動を通してどのような力が付くのか、分かるようにしている。
②	言語活動 ※指導方法の工夫が、当該教科等固有のねらいの達成に結び付くようにする。
②	個に応じた指導の機会を設定している。 ※指導方法の工夫が、当該教科等固有のねらいの達成に結び付くようにする。
2	問題解決的な学習等の機会を設定している。 ※指導方法の工夫が、当該教科等固有のねらいの達成に結び付くようにする。
2	体験的な学習の機会を設定している。 ※指導方法の工夫が、当該教科等固有のねらいの達成に結び付くようにする。
2	ノート指導において、子供たちが自分の考えの変容を記すことを重視している。
3	「教えること」、「考えさせること」を明確に区別させたうえで、両者を関連付ける指導の手だてを工夫している。
3	より分かりやすく教える工夫がなされている。
4	評価規準が、「力を付けた子供(観点別評価B)の姿」となっている。
4	観点別評価状況のAおよびCの子供に対応する手だてが準備されている。
⑤	教師の発話によって、子供たちの学習課題が明確になっている。
⑤	学習形態等の工夫により、子供たちが主体性をもって学習している。
5	学習環境等の整備等が、学習の一助となっている。

(5) 子供の視点 観察シート

「学びがいのある授業」観察シート【子供の視点】

授業者	
-----	--

番号	項目	当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
1	子供たちが、身に付く「力」とその価値が分かる。	4	3	2	1
2	子供たちが、学び方を分かっている。	4	3	2	1
3	子供たちにとって、教材が魅力的である。	4	3	2	1
4	子供たちにとって、学習課題が適度な難易度である。	4	3	2	1
5	子供たちは、頑張れば認めてもらえる授業である。	4	3	2	1

自由記述欄(気付いた点とアドバイス)	
<p>結論があり、それを多面的に考察させる手法として、「同じ結論を異なる見方をしている人を探して、その理由を考えさせた」のは、大変参考になった。また、児童の変容を見逃さないところも、子供たちにとって学びがいのある要素が多い授業であると感じた。</p>	

【教科】 : から : まで参観

年 月 日 記入者

番号	☆『児童・生徒理解』の具体項目
1	子供たち自身が、当該の学習によって「どのような力が身に付き」、実生活や実社会にどう生きるのかについて、理解して学習を進めている。
1	導入段階で、身に付ける「力」とその価値、学習活動の留意点を、子供の発達段階に応じて分かりやすく説明している。
②	ワークシートを作成する際、子供たちが自分の考えを文章で書き込む欄を設けている。
2	子供たちが、主体的に「自分の考え」を記述している。
2	友達の新しい考えや、友達の新しい発見を加えながら、「自分の考え」を更新している。(ノートやプリントなど)
③	教材が、子供たちの知的好奇心を喚起するものである。
3	教材が、子供たちにとって探求しがいのあるものである。
4	当該教材が得意な子供、苦手な子供の立場に立ち、適度な難易度を設定している。
4	個に応じた指導を行っている。
4	習熟度に応じた指導を行っている。
④	手だての有効性について検証している。
5	子供と教師の信頼関係が良好である。
5	子供一人一人のよさや可能性、進歩の状況など積極的に評価している。
⑤	認め合い、支え合い、励まし合う学習集団の風土が醸成されている。

- ※ 学力向上推進委員会では、小学校3グループ、中学校2グループで研究協議を進めてきた。授業観察の際には、グループ毎に「教師の視点」で観察するグループ、「子供の視点」で観察するグループに分かれた。
- ※ 教科に関係なく、学習過程を「1 課題をつかむ→2 一人で考える→3 集団で交流→4 振り返り」とした。このシートをもとにグループ協議・発表を行い、田中教授から指導・講評をいただいた。

教師の視点

○子供に身に付く「力」とは？
 ・学習指導要領の指導事項をもとに、子供に身に付く「力」を明らかにする。

教師1 子供に身に付ける「力」が明確になっている
 ○ねらいの焦点化
 ・単元（題材）、本時のねらいに、身に付ける「力」を明確に明記する。
 ・活動自体を目的とせず、活動を通して「力」をつけることを目的とする。
 ○効果的かつ自覚的な学習活動の展開
 ・子供たちが、活動を通してどのような「力」が付くのが分かるようにする。
 ○ねらいをどのように提示するか？
 ・子供が、この時間何が分かればいいのか、どう活動していいのかが分かるねらいを具体的に示す。
 ・既習事項の活用

教師2 教えること、考えさせることの明確な区別
 ○より分かりやすく教える工夫
 ・「教える」ことは、子供が自ら学び考えるために必須です。教えるべきことを分かりやすく教え、それらを活用して考えさせるようにする。

教師3 「力」を付ける手だてが準備されている
 ○問題解決的な学習、個に応じた指導、言語活動 等
 ・指導の工夫が、当該教科等固有のねらいの達成に結びつくようにする。

教師4 「力」が付いたかどうか？適切に評価され、指導に生かされている
 ○適切な評価規準の設定と活用
 ・評価規準とは、「力を付けた子供の姿（観点別評価B）」の姿。
 ○観点別学習状況の評価 A および C の子供に対応する手だて
 ・A および C の子供それぞれに対する具体的な手だてを準備する。

< 指導計画の作成、授業観察の視点 >

共通主題 「主体的に学習し考える子供を育てる授業づくり」	
『子供主体の授業』の展開例	具体的な指導例
☆子供たちが見通しをもつ 課題を把握する 学習課題をつかむ場面を設定した ○子供に身に付く「力」とは？ 教師1 ねらいの焦点化 □子供たちは課題をつかんでいた。 □子供たちは解決の見通しをもつことができた。	○子供たちの関心・意欲を高めたり、不都合感を感じさせたりする問題を提示する。 ○子供たちが課題をつかんだタイミングで課題を板書した。 ○見通しについて、ペアで相談させたり、前で説明させたりして、既習内容を思い出させ、全ての子供に解決の見通しをもたせた。
○「教えて考えさせる指導」が行われている 教師2 教えることと考えることを関連付ける ☆子供たちが問題解決を図る 一人で考える場面を設定した ○「力」を付ける手だてが準備されている 教師3 問題解決的な学習 等 □子供たちは考えを書いたり、表したりしていた。 ○言語活動 ☆子供たちの知識や考えを深める活動例 集団で交流する場面を設定した □子供たちは、自分の考えとその理由を伝えていた。 □子供たちは、学習課題を意識した発表や話し合いをしていた。	○子供たちが考える適切な時間を設定した。 ○机間指導を行い、個に応じた頑張りや認め、適切な声かけができた。 ○ペアで考えを伝え合う時間をつくる等、一人一人に考えを発表させた。 ○子供のノートをスクリーン等に映し出して前で発表させる等、学習のゴールを意識した発表をさせた。 ○発問の後に数秒の間をとって指名したり、ペアで話し合わせたりして、全員が考えを深められるようにした。
☆子供たちが学んだ知識や技能を振り返る（つかう） ふりかえる場面を設定した □子供たちは、学んだことを自分の言葉で書いたり、発表したりすることができた。 □子供たちは、学んだことを使うこと（確認問題、適応問題等）ができた。	○授業の流れがわかる板書ができた。 ○課題を主語にして書かせる、キーワードを入れて書かせる等、まとめ方を工夫させた。 ○本時の学習を確かめる確認問題（宿題）等を出した。

導
 入
 展
 開
 終
 末

子供の視点

子供1 身に付く「力」とその価値が分かる
 ○実社会や実生活との関わりを重視する
 ・子供たち自身が、当該の学習によってどのような力が身に付き、実生活や実社会にどう生きるのかについて、理解して学習を進めることで、より学習効果上がる。

子供3 教材が魅力的である
 ○知的な好奇心を喚起するものである
 ○探究のしがいがある
 ・子供の実態に照らし合わせて、十分に吟味するとともに、ねらいの実現に向けて、効果的な活用方法を研究する。（教材研究）

子供2 学び方が分かる
 ○ノートは思考の足跡
 ・友達の考えや新しい発見を加えながら、「自分の考え」を更新させる。

子供3 教材が魅力的である
 ○知的な好奇心を喚起するものである
 ○探究のしがいがある。

子供4 適度な難易度である
 ※適度な難易度とは、子供の力のレベルよりもやや上のレベルを指す。
 ○苦手な子供、得意な子供の立場にたつ
 ○習熟に応じた指導
 ○個に応じた指導

子供5 頑張れば、認めもらえる
 ○子供と教師の信頼関係の確立
 ○認め合い、支え合い、励まし合う学習集団の風土の醸成
 ○個人内評価の重視
 ・子供一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価しようとするもの。

平成27年度 学力向上推進委員会研修授業一覧

○第1グループ

検証授業実施日	学校名	教科名	単元（題材）名
平成28年1月26日（木）	第一小学校	国語	劇遊びをしよう
平成27年11月26日（木）	第二小学校	国語	論語の世界へようこそ
平成27年10月1日（木）	第三小学校	理科	水溶液の性質
平成27年11月5日（木）	第四小学校	国語	食べ物のひみつを教えます
平成28年1月14日（木）	第五小学校	算数	図を使って考えよう

○第2グループ

検証授業実施日	学校名	教科名	単元（題材）名
平成27年12月10日（金）	第六小学校	算数	はしたの大きさの表し方を考えよう
平成27年9月28日（火）	第七小学校	算数	分数と小数、整数の関係を調べよう
平成27年12月1日（火）	成木小学校	図工	まほうのモール ナリキリン星人になあれ
平成27年9月5日（月）	河辺小学校	社会	新しい時代の幕開け
平成27年11月24日（火）	新町小学校	算数	小数の仕組みを調べよう
平成27年10月20日（火）	霞台小学校	算数	はしたの大きさの表し方を考えよう

○第3グループ

検証授業実施日	学校名	教科名	単元（題材）名
平成28年2月2日（金）	友田小学校	理科	ふりこの動き
平成27年9月29日（火）	今井小学校	体育	島っていこうぜ（ボール投げゲーム）
平成27年12月3日（火）	若草小学校	算数	図形の角
平成27年10月13日（月）	藤橋小学校	算数	およその数の表し方を考えよう
平成27年12月14日（火）	吹上小学校	自立活動	言葉で遊ぼう 何でもつかみゲーム

○第4グループ

検証授業実施日	学校名	教科名	単元（題材）名
平成28年1月12日（火）	第一中学校	国語	作品の魅力を伝えよう
平成27年11月10日（火）	第二中学校	数学	三平方の定理
平成28年2月8日（月）	第三中学校	国語	学んで時にこれを習う
平成27年10月30日（金）	西中学校	国語	扇の的（平家物語から）
平成28年2月9日（火）	第六中学校	英語	Lesson 8-1 現在進行形

○第5グループ

検証授業実施日	学校名	教科名	単元（題材）名
平成27年9月18日（金）	第七中学校	音楽	我が国の伝統的な楽器、和楽器を演奏しよう
平成27年10月16日（金）	霞台中学校	数学	2元1次方程式
平成27年10月29日（木）	吹上中学校	理科	動物の反応の仕方
平成28年1月29日（金）	新町中学校	数学	比例と反比例の利用
平成27年9月24日（木）	泉中学校	理科	動物の生活と生物の変化

IV 学力ステップアップ推進地域指定事業の取組

東京都教育委員会は、小・中学校の算数、数学、理科における教員の指導力向上、児童・生徒の基礎学力の定着を目的として、学力ステップアップ推進地域指定事業を、平成27年4月より実施している。

青梅市は、東京都教育委員会より学力ステップアップ推進地域指定を受け、平成27年4月1日より平成30年3月31日までを実施期間として本事業を行うこととなった。以下に、青梅市で行っている学力ステップアップ推進地域指定事業の取組を記す。

1 放課後・長期休業日等の補習実施

市内小・中学校の放課後、長期休業日等で、算数、数学の補習を実施する。補習の参加対象児童・生徒は「全国学力・学習状況調査」、「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の学力D層に位置付く児童・生徒を中心に募集、実施し、基礎学力の定着を図る。

2 外部指導員の活用

補習学習では、外部指導員（大学（院）生、退職教員、地域人材等）が、東京ベーシック・ドリルや学校が準備した教材等を活用し、補習に参加した児童・生徒の学習支援を行う。

3 基礎学力定着アドバイザーの活用

基礎学力定着アドバイザー（宇津木順一先生、元木靖則先生）が、小・中学校の要請に応じ、教員の算数、数学、理科の指導力向上に関わる支援として、算数、数学、理科の授業観察や校内研修会の講師として指導・助言を行う。

4 授業アンケート調査、理科意識調査、東京ベーシック・ドリル診断シートによる検証作業

各小・中学校において市独自の授業アンケート調査、理科意識調査の実施、東京ベーシック・ドリル診断シートの活用を行い、本市の学習状況等について検証を行う。

5 連絡協議会の開催

学力向上推進委員会を学力ステップアップ推進地域指定事業連絡協議会として年間3回実施し、各小・中学校における学力ステップアップ推進地域指定事業の進捗状況の確認や情報共有を推進する。

6 青梅市小学校教育研究会・青梅市中学校教育研究発表会における実践報告

青梅市小学校教育研究発表会、青梅市中学校教育研究発表会において、本事業の実践事例を報告し、本事業実施における成果と次年度の改善に向けて周知を図る。

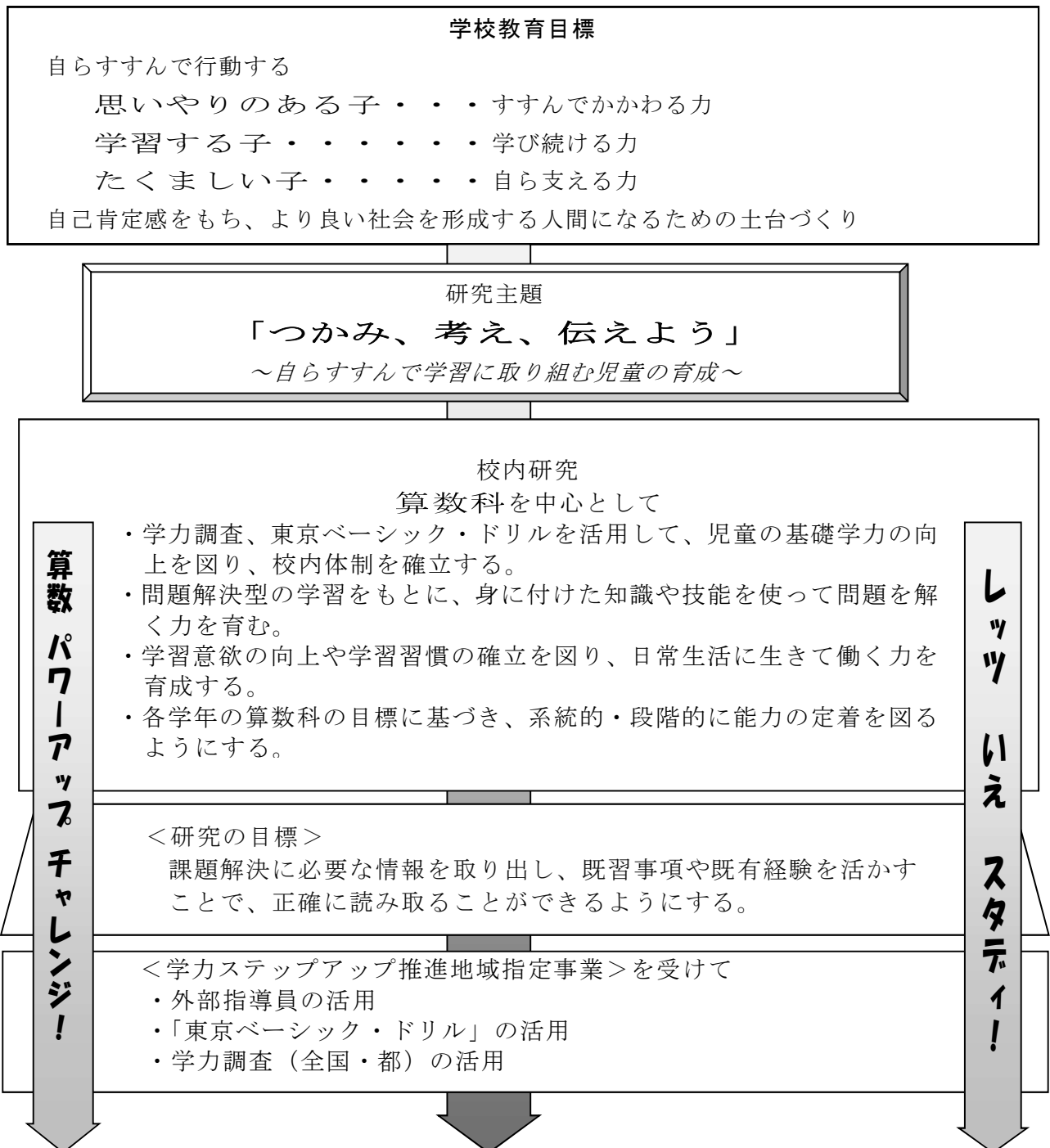
研究主題 「つかみ、考え、伝えよう」

～自らすすんで学習に取り組む児童の育成～

青梅市立新町小学校

I 校内研究

1 研究構想図



2 各学年のめざす児童像

学年	児童に見られる課題	めざす児童像	児童像に迫るための手立て
1年	<ul style="list-style-type: none"> 何を聞かれているか理解する力が弱い。 集中できる時間が短い。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報を取り出して、課題解決ができる子 課題をとらえて問題に取り組む子 	<ul style="list-style-type: none"> 問題文の中のキーワードに教師と一緒に線を引く。 声に出して問題文を音読する。 問題文を具体物や図に表して示す。
2年	<ul style="list-style-type: none"> 文書から課題把握をできない。 基礎的な計算に時間がかかりすぎる。 	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項を自ら想起し、新しい課題を解こうとする子 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な計算を習熟させることで、新しい問題に気軽に活用しようとする姿勢を育む。 文章のみならず、挿絵を見せたり、児童に寸劇をさせたりすることで、その出題が自身の生活に密接であることに気付かせる。
3年	<ul style="list-style-type: none"> 文章問題の意味を読み取れず、解決する手段を見つけられない児童がいる。 最後まで問題を把握せずに、答えを出そうとする傾向がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を正しくつかみ、自力で解決する子 	<ul style="list-style-type: none"> かんたんな数値に置き換えて考えさせる。 既習事項を活用して考えさせる。
4年	<ul style="list-style-type: none"> 文章問題の意味を読み取れず、問題に取り掛かることのできない児童がいる。 授業への取り組み方や家庭学習などでの復習の取り組みに差が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を把握し、自分なりの解決方法をもてる子 	<ul style="list-style-type: none"> 問題文の中で答えを導くために必要な言葉に線を引き確認する。 数直線や図などを用いてわかっていることを整理する。 授業の始めに既習事項を確認し、必要に応じて掲示する。
5年	<ul style="list-style-type: none"> 実物がないとイメージできない。 問題を把握する力が弱い。 説明力がない。 考えをもつことはできているが、深まりがない。 	<ul style="list-style-type: none"> 問題の必要な情報を取り出し、自分の考えをもてる子 	<ul style="list-style-type: none"> 問題文の「わかっていること」と「聞かれていること」に毎回同じ印をつける。 問題文を図式化する活動をする。 ①問題の把握、②見通し（計画）をもつ、③実行（個人思考）の手順を行う。
6年	<ul style="list-style-type: none"> 文章題、文と図、資料、グラフ、表などを結び付けて課題をとらえたり、考えたりすることが苦手である。 見積もりや量感覚などのイメージできない。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報を取り出せる、 問題場面をイメージできる「正確に課題（問題）を把握する子」 	<ul style="list-style-type: none"> 分かっていること、聞かれていることを丁寧にささえる。 →必要に応じて数直線、図にする。 既習事項の確認、掲示。

3 授業実践

低学年

2年 「計算のしかたをくふうしよう」 1 / 4時

<単元の目標>

- ・加法の結合法則、簡単な加減の暗算の仕方を理解することを通し加減計算についての理解を深め、それらを用いる能力をのばす。

<本時の目標>

- ・加法の結合法則と（ ）の使い方を理解し、3口の加法計算ができる。

<成果>

- ・内容がしっかりと考えられていた授業で、適用問題までしっかりとできた。
- ・ICT機器を活用し、児童のノート等を見せることで分かりやすくなった。

<課題>

- ・「どのような順番で計算していくのがよいのかを考えよう」などと、めあての視点を絞る必要があった。その後、なぜこの順番にしたかを問えば、よりスムーズな流れになり、児童の思考の流れもより自然になったと考えられる。
- ・何を身に付けさせたいのかという意図を明確にし、「どうすればできそうか」「何を使えばできそうか」という既習事項を活用して、見通しをもたせる必要がある。
- ・児童同士が思考の段階を見せ合うために、ペア学習で表現する機会を確保し、相互評価できると良かった。

低学年の授業の様子



中学年

3年 「重さを数で表そう」 1 / 8時

<単元の目標>

- ・重さの測定などの活動を通して、重さについて単位の意味と測定の原理を理解し、重さの測定できるようにするとともに、重さについて量の感覚を身に付けられるようにする。

<本時の目標>

- ・重さの比べ方を考え、単位の必要性に気付くことができる。

<成果>

- ・「重さチャンピオン大会」という場の設定、具体的な操作により、子供たちの意欲を高めることができた。
- ・習熟の程度に合わせて自力解決の見通しをもたせ、適用問題にも多く取り組ませることができた。

<課題>

- ・重さの比べ方を児童に考えさせる必要がある。見ても持っても分からないから、見える形にするにはどうしたらよいかをじっくり考えさせ、ノートに書かせ、考えを学習に生かせると良い。

中学年の授業の様子



〈単元の目標〉

- ・ 変わる2つの数量の関係を考察することを通して、比例や反比例の関係について理解し、関数の考えを伸ばす。

〈本時の目標〉

- ・ 比例の性質を問題解決に用いることができる。

〈成果〉

- ・ 児童にとり身近な物を取り上げた問題提示（画用紙・キャップの数を数えるなど）、課題意識のもたせ方（経験談など）、既習の想起のさせ方が良かった。
- ・ 自力解決の後の互いのノートを見合う学び合いが良かった。

〈課題〉

- ・ 適用問題は、簡単な数値の方が良かったのではないかと。Yを求める問題になったので、難しく感じる児童もいた。Yを求める適用問題に入る前に、Xを求める問題を入れた方が良かった。
- ・ 問題を解く必要感をもたせるために、自由に数を選ぶ活動が入る余裕をもたせたほうが良かった。

高学年の授業の様子



4 研究の視点

〈基礎・基本の学力を育てるために〉

⇒「算数パワーアップチャレンジ」

「東京ベーシック・ドリル」

「学力ステップアップ」等の有効な活用

〈思考力・表現力を育てるために〉

⇒課題に対する自分の考えの表現とその交流

〈主体的に学習に取り組む態度を育てるために〉

⇒「レッツいえスタディ」を活用した呼びかけ

「学カステップアップ」

Ⅱ 学力向上に向けた全校の取組

ねらい

- ・今年度、本校では＜学カステップアップ推進地域指定事業＞を受け、算数の基礎的な計算力の定着により、ボトムアップを図る。

対象

- ・4・5年生の希望者を対象に、期間（週一回50分 4～5回）を決めて、継続して取り組む。夏休みには4年生を先行実施し、2学期に入ってから、4・5年生を対象とした。受講人数を10人前後にして、取り組みを続けている。

使用教材

- ・東京ベーシック・ドリルや市販の資料集を用いて、一回につきA4、4～5枚程度（問題数にして50～100問）を解く。つまずきには個々に対応し、反復練習を行う。

方法

- ・外部指導員2～3名を配置し、個々の児童の苦手な問題に対して丁寧に対応する。
- ・児童によっては、たし算・ひき算の2年生程度の計算問題から始めるようにした。
- ・指導員が机間指導しながら、丸付けをすることで、「問題を解けた。」という気持ちをもてるようにしている。

成果

- ・これまで意欲や自信をもちにくかった児童も、ひとつひとつステップを踏んで取り組み、意欲や自信につながる様子が見られた。
- ・苦手意識をもった児童も少人数で実施することで、集中して安心感をもって取り組む姿が見られた。

課題

- ・学カステップアップ推進地域指定事業を通して、個々の児童の課題が明らかになってきた。今後は家庭との連携を強化し、家庭学習にもつなげていく必要がある。
- ・基本的に外部指導員が中心に支援しているため、児童の実態把握や状況を担任と確認するための時間が必要になってくる。

「学カステップアップ」の学習場面



「東京ベーシック・ドリル」

ねらい

自分の課題に合った問題を解いていく中で、基礎的・基本的な知識や技能について、確実に身に付ける。

対象

- 2年生 …… 「東京ベーシック・ドリル 1年算数」を活用する。
- 3年生 …… 「東京ベーシック・ドリル 2年算数」を活用する。
- 4年生 …… 「東京ベーシック・ドリル 3年算数」を活用する。
- 5年生 …… 「東京ベーシック・ドリル 4年算数」を活用する。

方法 <基本シート（診断）A1, A2の実施と東京ベーシック・ドリルの活用>

- ① 「基本シート（診断）A1, A2」をプリントアウトする。
- ② 児童数分印刷して、各学級で実施する。
- ③ 解答ページを使って自己採点・自己診断を行う。
- ④ 必要に応じ、まちがえた問題の解説シートを活用して、解き方を確認する。
- ⑤ 「東京ベーシック・ドリル」活用し、まちがえた問題の練習問題に取り組む。
- ⑥ 確実にできるようになったら、「基本シート（診断）B1・B2」を行う。
診断テストが全問できるようになるまで、繰り返して練習問題に取り組む。
また、理解が不十分な児童に対しては、さらに前学年の問題をプリントアウトして個別に使用することも効果があるので、有効に活用する。

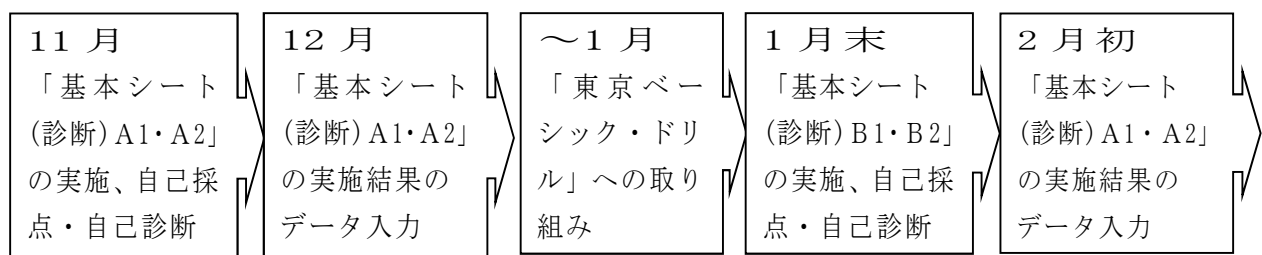
<実施結果のデータ入力>

実施結果をもとに、「採点プログラム」に入力する。

採点プログラムの使い方

- ① 入力シートに、学校名、児童数、組、出席番号を記入する。
- ② 入力シートに、大問ごとの採点結果を正答「1」、誤答「0」と記入する。
- ③ グラフシートに、大問ごとの正答率、平均の正答数、平均の正答率
正答数ごとの人数、割合、正答数分布グラフが表示される。

「東京ベーシック・ドリル」の活用後（3学期）に、「基本シート（診断）B1、B2」を実施し、再度、実施結果のデータを入力して取り組みの後の成果を測る。



「算数パワーアップチャレンジ！」

ねらい

- ・ 児童にみられる基礎的な計算力の課題に対し、学年の実態に沿った課題を用意し、継続的にまた反復的に取り組むことで、算数の学力の向上を図る。

方法

- ・ 木曜日の朝（8：20～30）学級で「算数の朝学習」の取組の指導にあたる。
- ・ 10分間で答え合わせとシートへの記入までできるように、課題に取り組む時間は3分間を目安とし、課題を終えたら答え合わせをし、その結果をシートに記入、ファイルに整理する。学年に応じて計算の種類や問題数を調整する。

内容

- ・ 課題については、算数の学習を進めていく上で、基礎・基本の力となる計算力を向上させるものとし、各学年の児童の実態に合わせて準備する。
- ・ 各学年研修部を中心に、教材作成ソフト（<http://dorilu.net/>「出木杉君」）を活用し、内容（計算の種類や問題数）を決めて用意する。
- ・ 各学期の初めに、各学年で共通の問題に取り組み、継続的に結果を記録することで、成果と課題を検証できるようにする。

<取組の流れ>

- ① 問題の配布
- ② 課題への取り組み（3分間を目安）
- ③ 答え合わせ（各自または一斉）
- ④ シートへの記入とファイルへの整理

現学年の児童に、基礎・基本の力として最低限必要だと考える内容にしぼり、定着を図りたい内容を繰り返して行うようにしている。

成果

- ・ 継続して繰り返し取り組むことで、全体的に速く正確に計算できるようになり、基礎的な計算力の向上が見られてきている。
- ・ 同じ問題に取り組むことで、これまでの自分の記録と比較して伸びを感じることができ、達成感が得られている。

課題

- ・ 今後は、発展的な問題にも取り組んでいけるような支援体制を充実させていく。
- ・ 問題を解くことができない児童への指導や支援を十分に行うことができていないため、個別に問題を変えて取り組むなど工夫が必要である。

「算数パワーアップチャレンジ」の学習場面



「レッツいえスタディ！」

ねらい

- ・ 毎日の学校での学習内容を確実なものとするために、家庭学習が重要であると考え、学習の手引き「レッツいえスタディ！」を各家庭に配布し、家庭学習の充実を図る。

方法・内容

- ・ 学期に一度「レッツいえスタディ！」週間を設定し、カードを配布して取り組みの様子を把握し、全家庭に取り組みへの協力を呼びかける。
- ・ 家庭での学習時間のめやすは、「学年×10分」と設定する。
- ・ 学年として、共通して特に力を入れて取り組ませたい学習内容や学習の仕方について、リーフレットの中で紹介する。

成果

- ・ カードを活用したことで、家庭学習への意識が高まり、「できた」「わかった」「集中できた」など達成感を得られていた様子がみられた。平均すると、各学年、およそ学年×10分間程度学習できている。
- ・ 自分からどんな学習に取り組むかを考え、継続して主体的に取り組む姿がみられた。

課題

- ・ 取り組んでいる時間、内容など、各学年全般的に大きな個人差がみられるため、保護者会や学校便りなどを通して、取り組みを振り返る時間が必要である。

Ⅲ 小中一貫教育の推進

新町中校区（新町中学校・新町小学校・藤橋小学校）では、小中9年間の系統的な指導と円滑な接続を目指し、小中一貫教育合同研修会を年間3回実施している。

内容

- ① 9年間を見通し、児童・生徒の学力の実態に応じて、身に付けさせたい力を明確にし、その実現のための授業改善を進める。
 - ・ 目指す子供像を「自らすすんで行動できる子」と設定し、共通のカリキュラム部会と各教科部会で、研究を推進していく。
 - ・ 小中の教科指導の円滑な接続を推進するため、互いに授業参観を行い、異校種の実態を把握する。
- ② 各学校間の指導者、児童生徒間の一層の交流および実践活動を推進する。
 - ・ 生徒会、児童会を中心に、あいさつ運動、いじめ防止ポスターの作成、交流
 - ・ 小中で連携してできる授業の模索、実践する。

研究主題

「学力ステップアップ推進地域指定事業の実践報告」

— 青梅市立霞台中学校での取組例 —

青梅市立霞台中学校

I 学力ステップアップ推進地域指定事業の概要について

1 学力ステップアップ推進地域指定事業の趣旨

東京都教育委員会は、平成27年度の学力向上に関わる取組の主要施策として、「学力ステップアップ推進地域指定事業」を実施している。本事業の趣旨は東京都教育委員会ホームページにて、以下のように記載されている。

「学力ステップアップ推進地域として指定した区市（10地区）に、3年間外部人材の派遣を行い、小・中学校の算数・数学、理科における教員の指導力向上、算数・数学における児童・生徒の基礎学力の定着を図る。さらに、推進地域での成果を全都に普及することにより、都内公立小・中学校の児童・生徒の基礎学力の定着を図る。」（東京都教育庁指導部義務教育指導課ホームページより）

本事業を霞台中学校で実施するに当たり、本校の生徒の実態に即した実施計画を立てた。

2 霞台中学校における本事業の位置付とねらい

本事業の示す趣旨を踏まえ、本校では「中学校数学の基礎学力の定着に課題を抱える生徒」の抽出を行い、放課後および長期休業中の効果的な補習活動を実施することを想定し、基礎的・基本的な学力の定着に課題のある生徒への学力向上策として位置付けた。

霞台中学校が抱える課題に、基礎学力の定着が挙げられる。本校では、授業改善や、小テストの実施など、様々な基礎学力の定着に向けた取組を行ってきた。しかし、日頃の授業では、基礎的な学力の定着に課題のある生徒に対して、一人一人に多くの時間を割いて、個別の学習指導を行うことが難しい。また、放課後や長期休業中、教員は部活動の指導や職員会議等により、基礎学力の定着に課題がある生徒に対して補習等の時間を費やすことに時間的制約が生じている。生徒たちも、放課後の部活動を熱心に取り組んでいることもあり、部活動の時間を削って自主的な補習学習の機会を設定しても、生徒自身で行える自主的な補習には限界が生じる。

以上の理由から、学力ステップアップ推進地域指定事業による放課後等の補習活動では、「普段の授業内ではフォローが難しい内容を扱う」、「教員の放課後の諸会議や授業のための学習準備との兼ね合いを想定し、過重な負担を生じさせない」、「放課

後の生徒の部活動に影響を生じさせないこと」の3点に留意して補習活動を設定した。

II 霞台中学校での取組方法

1 対象生徒の抽出

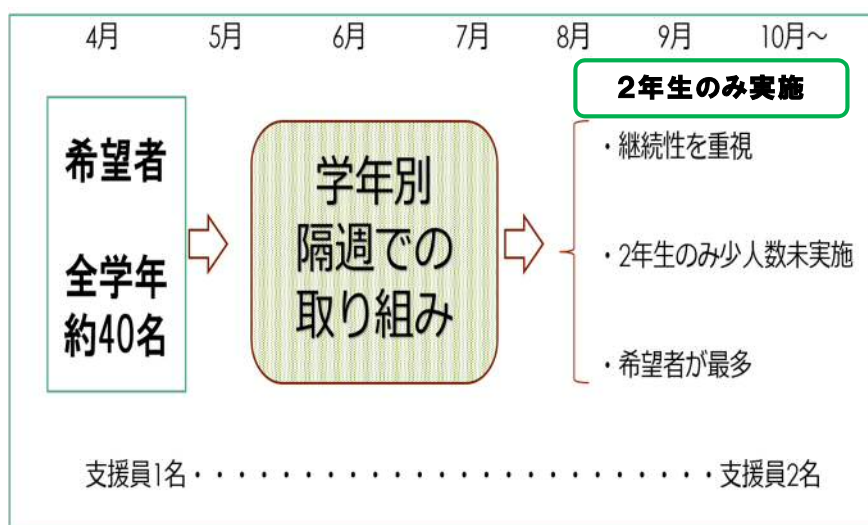
数学科の教員で、各学年から基礎学力の定着に課題を抱える生徒を学習状況に応じて抽出した。定期テストなどの結果も踏まえ、日頃の授業の様子なども考慮し、たし算、引き算、かけ算、割り算などの数学における基礎的・基本的な学習事項の定着に困難を抱える生徒を中心として補習活動対象とした。

上記の生徒の学習課題状況の程度に応じて生徒に補習活動についての呼びかけを行い、参加希望者を対象に実施することとした。呼びかけに応じた生徒は、各学年で希望者数に差が生じたものの、全学年を合計して総数40名以上が補習に参加を希望する状況となり、当初の参加見込み数を超える人数となった。

放課後等で全学年が一斉に補習活動を行うには、外部指導員の人材確保状況のため、希望者全員を対象に一斉に補習活動を実施することが難しい状況となった。外部指導員も補習開始前では、1人確保の状況であった。そのため、補習の実施に当たり、全学年対象としながらも、放課後等に、各学年同時に補習活動を行うことは見送ることとなった。また、補習活動実施の最初期には、試験的試みとして参加希望者が全学年にいたこともあり、1年から3年を隔週で分けて補習活動を実施したが、継続的な補習活動による学習支援からの基礎学力定着のためには、運営上の課題が大きく生じることとなった。

2学期中盤より、補習活動の実施対象を、四則計算等の基礎的な事項で顕著な課題が共通事項として多く見取ることもあり、2年生の生徒に限定して補習活動を実施することとした。また、実施学年を2年生に限定することで、補習活動の主目的を、継続的な補習活動の充実による基礎学力の定着として実施することとした。(図1参照)

<図1 対象生徒の変遷の様子>



2 学習内容の設定

学習内容の設定について、2学期以降の2年生より紹介する。本校では、3学年中2年生のみ、数学の授業で習熟度別による少人数の学級編成を実施していない。また、日頃の数学の授業で基礎的な学力の定着に課題のある生徒が比較的多く在籍する学年でもある。そこで2年生の学習状況に応じ、基礎的・基本的な学力の定着と向上を目指して、補習活動では以下の内容を学習内容として扱った。

第一は、小学校算数や中学1年で学習する内容である単純な計算等の復習中心に学習内容とした。補習活動参加の生徒たちが基礎学力の定着に課題を抱えている大きな原因に、小学校や前学年の内容の定着が不十分のまま、現在に至っていることが挙げられる。このような生徒達は、自分自身の学習状況について、漠然とした苦手意識を感じている場合が多いが、自分自身で基礎的・基本的な学力の定着に向けて、意欲的に学習に取り組むには、復習による基礎学力の確認・定着が必要であるため学習内容とした。

第二は、現在数学の授業で扱っている課題を学習内容とした。現在の数学の学習内容を補習活動で扱うことにより、生徒に授業やテストに直結する学習内容であることを強調し、生徒の学習意欲の向上に働きかけることがねらいである。また、補習活動に参加する生徒にとっては、日頃の数学の授業で習ったことをすぐに復習する機会のある場となるため、「できそう」「できる」といった実感を伴った学習の成果にも繋がると思った。補習活動に参加した生徒「できた」実感を、家庭学習へと波及させ、補習活動を家庭学習まで波及させることを想定し、学習内容を設定した。

実際の補習活動では、上記目的の達成へ向けて、既習事項中心の復習プリントや現在の数学の授業で扱っている内容に繋がるようなプリントを用意し、生徒の学習意欲の向上と継続に留意しつつ、補習活動に参加した生徒が「できた」という実感を大事にしなが、基礎学力の定着を図った。

3 補習活動の設定時間帯の工夫

教員による部活動指導や校内における諸会議参加による時間確保のため、毎週水曜日の職員会議中の時間帯（生徒は部活動待機として各教室で会議終了まで待機）を補習時間として設定した。長期休業中の補習活動は、夏季休業中の初めと終わりの週に、それぞれ5日間ずつ、計10日間を設定した。

また外部指導員には、事前に学習内容設定の趣旨や指導上の留意点を確認し、指導における共通理解を図って後に補習活動に参加してもらった。

職員会議などの時間を補習活動として設定したため、教員は職員会議に参加することができ、生徒も部活動に参加することができる環境のもと、基礎学力の定着に特化した内容で補習活動を実施することができた。

Ⅲ 成果と今後の見通し

1 生徒へのアンケート実施

補習活動参加の生徒へアンケートを（12月）実施し、成果検証を行った。なお、設問内容は以下の通りである。

- ① 今回の補習が役に立っているか
- ② どのような内容が役立ったか
- ③ これからどのようなことをしたいか

設問は、補習活動に参加している生徒の感じている「実感」、「効果」、「今後について」を、できるだけ分かりやすくまとめることを想定して設定し、実施した。

2 アンケート結果の成果検証

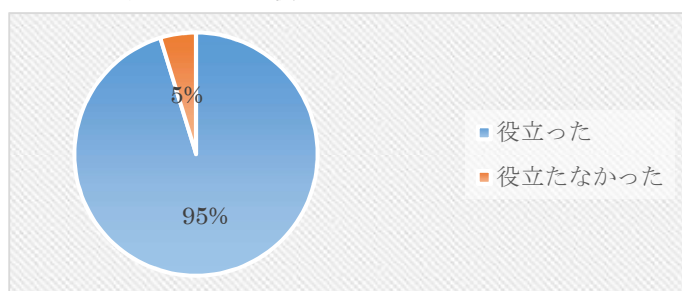
以下に、それぞれのアンケート回答の取りまとめと成果検証を考察する。今回は、一度でも補習に参加したことがある2年生20名を対象とした。

① 「今回の補習が役に立っているか」

役に立っているか、役に立っていないかの2択の質問である。回答した生徒の95%が、「役立った」と回答しており、効果を実感している生徒がほとんどであることが分かった。（図2参照）

前述したとおり、外部指導員の不足などもあり、補習事業開始当初より、毎週継続して補習活動を受けられなかったこともあり、補習の効果を実感できない生徒もいることが分かった。

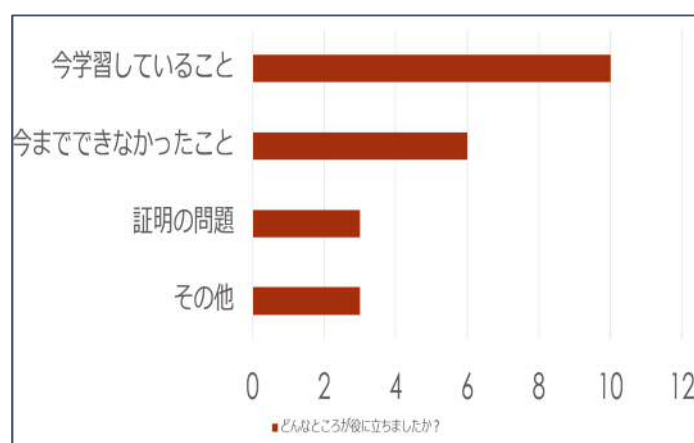
<図2 今回の補習が役に立っているか？>



② 「どのような内容が役立ったか」

役に立ったと答えた生徒に、自由記述で回答を求めた。（図3参照）最も回答が多かったのが、50%の「現在学習している内容」であった。補習活動が定期テストの内容と直結し、授業内容が補習でフォローアップされていることから、参加生徒は補習活動の効果を実感できたことが分かる。

<図3 どのような内容が役立ったか？>



基礎学力に課題を抱える生徒にとって、数学の授業中では十分に理解できなかった内容が、補習活動で既習事項の復習や繰り返しによって、当初のねらいである基礎学力の定着が達成できていることが分かった。補習活動の参加者には、日頃の数学の授業で実施している小テストで得点増加した生徒も見られた。

次に回答が多かったのは、30%の「今までできなかったこと」である。この回答にはあいまいな内容を含んではいるが、生徒が補習で小学校算数のプリントを真剣に取り組み、指導を受けつつも、最後は自力で「できた」と正答できた瞬間に何度も立ち会ったこともあり、30%の回答があったと考えられる。前述のプリントに取り組んだ生徒がうれしそうに「できた」ことを話していたことや、中学校1年生の既習事項をプリントとして準備した際は、「ずっと復習せずにいたけど、気になっていた内容だったので、やれてよかった。」と話す生徒もいた。このことは既習事項の復習に生徒が必要を感じることも表している。生徒達自身も、既習事項の復習を自分だけでは行えないことに課題意識をもち、それが基礎学力定着にとって大切なことと自覚している。基礎学力に課題がある生徒については、授業内で十分に時間を確保し、個別に対応することのできないという問題について、既習事項の振り返りが効果的な活動となっていることが分かる。

回答には図形の証明問題ができたという記述もみられた。記述した生徒にとって、図形の証明問題は、すぐにあきらめてしまっていたり、家庭学習で復習することが難しい問題であったりしたことが分かる。補習に参加したことで意欲的に学習に向かう姿勢が育っており、「自分にもできるかもしれない」という自己肯定感や自信をつけるきっかけになっていることが分かる。このように、補習活動に参加した基礎学力定着に課題を抱えた生徒も、学習への苦手意識と向き合い、積極的に学習に取り組めるようになったことが分かる。

③「これからどんなことをしたいか」

回答は「今学習している内容」がほとんどであった。普段の学習に困難を覚え、苦しんでいる現状が現れている。今の学習に苦しんでいる原因が、これまでの学習内容の定着ができていないところにある生徒が多いのが現状である。生徒の希望ののっとりながらも、うまく課題を設定し、今後の内容に繋がるようにしたり、既習事項が現在の学習に影響していることにもっと気付かせたりと、復習の重要性を生徒がしっかりと実感できるようにしていく。またこの取り組みが、後述する「家庭学習の習慣化」に繋がると考える。

3 課題と今後の見通し

①外部指導員の不足

一人の生徒に、一人の外部指導員が、つきっきりになっての指導が必要なレベルであったが、生徒の数に対して、外部指導員の数不足の状態である。補習活動を対象とした生徒達は、非常に簡単な四則演算にも多大な時間がかかり、多くの支援を必要とする学習状況がある。授業改善から対策していかなければならないことではあるが、今後は外部指導員の募集について今まで以上に地域へ呼びかけ、補習活動では参加生徒にとって必要な人数の外部指導員のもと、一人一人の生徒が細かく指導を受けることのできる環境を作っていけるようにしたい。

外部指導員の人材不足の原因は、学習時間が平日の15:00~16:00として挙げられ

る。生徒の部活動の活動時間を十分確保することを考慮した設定時間のためではあるが、外部支援員として参加したい地域の方々にとって、自身の仕事が終わっていない時間帯でもあるため、外部指導員として参加したいができない、といった課題が生じている。学校全体で対策を考えていかなければならない。

②生活指導の課題

他学年の生徒の関わりから、生活指導的な問題が起こることが懸念された。一つの教室に、教職員の目が行き届かない状態で、様々な生徒たちが同時に活動することになり、全学年同時の実施はできていない。「支援員の不足」という上記の課題とあわせて、学年ごとに教室を変えて指導できる状態にしていく必要がある。

③家庭学習の習慣化への課題

補習活動で行う学習内容は、数学の復習事項と現在の授業で扱っている題材を取り上げた。このことは補習活動に参加した生徒の家庭学習への影響を想定したためである。アンケート結果を分析すると当初の想定した生徒への影響とは異なる状況と課題が浮き彫りとなった。

補習活動に参加した生徒は、補習活動では意欲的に学習し普段以上の集中力で既習事項のプリント等に取り組んだが、補習活動での積極的な学習態度が家庭学習にまで波及していないことが分かった。補習活動に参加した生徒の中には、補習による学習で一定の満足感が生じ、結果、帰宅後の家庭学習がおろそかになってしまうこともあることが分かった。

補習を受けている生徒たちは、基礎学力の定着に課題があり、学習意欲の継続にも課題があるため、自分一人の力ではどのように学習すればよいか分ならず、結果として家庭学習に取り組む意欲がなくなってしまうと考えられる。補習活動に参加した生徒の「わかる」、「できる」経験を、その後の家庭学習に生かせるように指導していきたい。

以上の成果と課題を踏まえて、補習活動に参加した生徒の一層の基礎学力定着、学習意欲の向上を目指し、今後は本事業の取り組みを今以上に活性化させる。

平成27年度 全国学力・学習状況調査の概要について

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

(2) 調査の対象

- 小学校第6学年
- 中学校第3学年

(3) 調査の内容

①教科に関する調査（国語，算数・数学，理科）

- ・国語A、算数・数学A：
主として「知識」に関する問題を中心とした出題
- ・国語B、算数・数学B：
主として「活用」に関する問題を中心とした出題
- ・理科：主として「知識」に関する問題と「活用」に関する問題を一体的に出題

②質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

(4) 調査の方式

悉皆調査（対象者全てに行う調査）

(5) 調査日時

平成27年4月21日（火）

(6) 調査を実施した学校・児童生徒数

【小学校調査】 学校数 児童数

青梅市（全国）

17校（20,191校） 1,134人（1,074,707人）

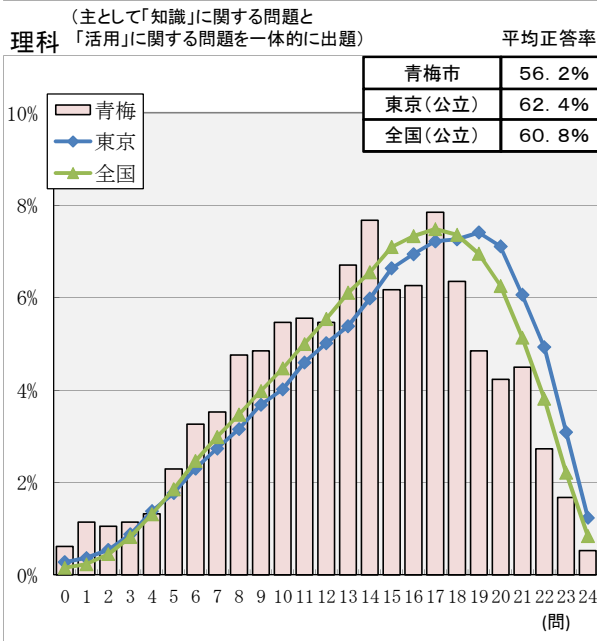
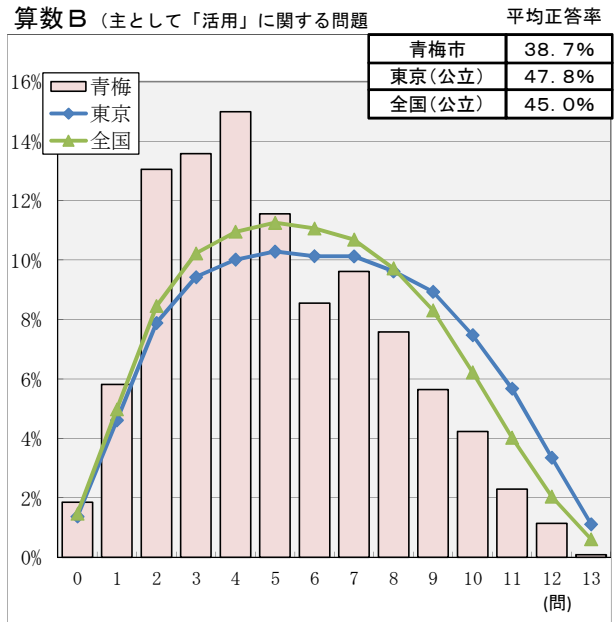
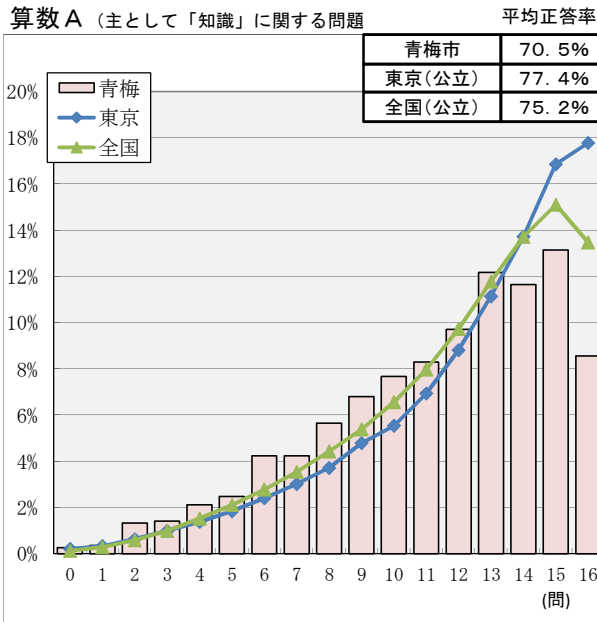
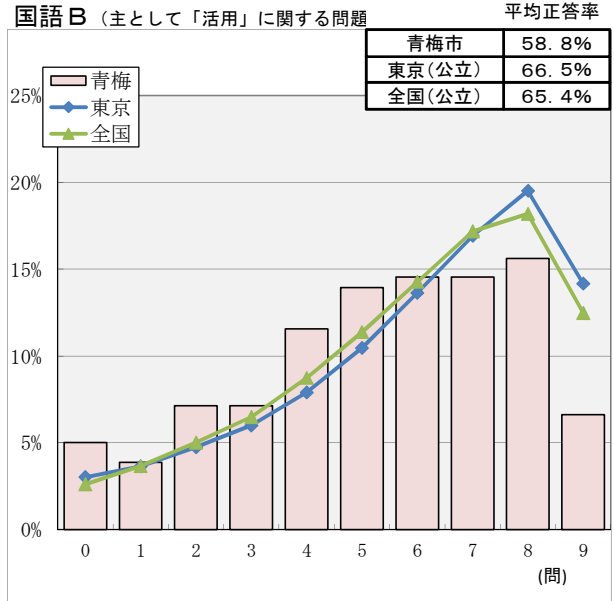
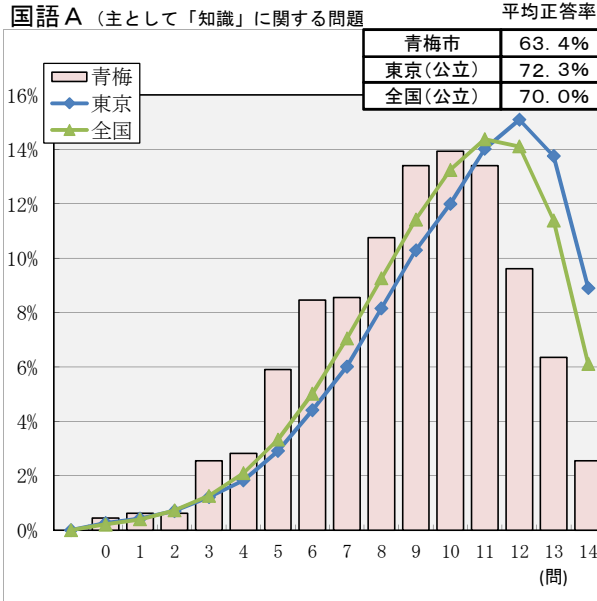
【中学校調査】 学校数 生徒数

青梅市（全国）

11校（10,120校） 1,184人（1,056,921人）

平成27年度「全国学力・学習状況調査」教科別正答数分布(小学校)

平成27年9月 青梅市教育委員会



＜結果の概要＞

- 国語Aにおいて、全国平均正答率を6.6ポイント下回っており、国語Bにおいて、6.6ポイント下回っている。
- 算数Aにおいて、全国平均正答率を4.7ポイント下回っており、算数Bにおいて、6.3ポイント下回っている。
- 理科において、全国平均正答率を4.6ポイント下回っている。

＜改善策＞

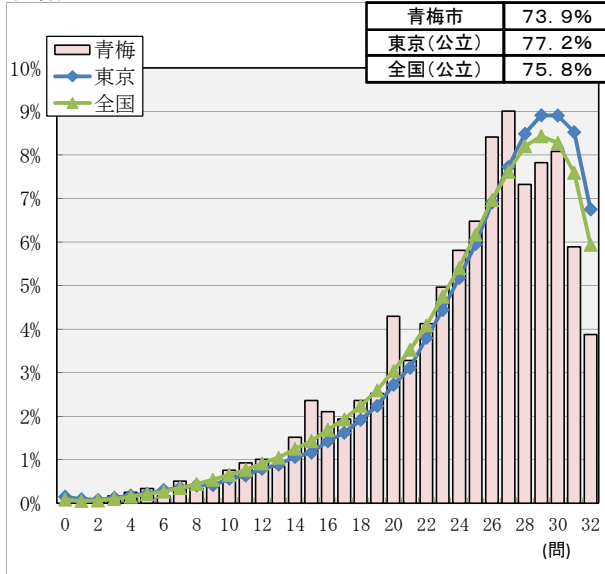
- 学力向上推進委員会において、調査結果の分析を行い、授業改善を図っていく。
- 青梅サタデースクールを拡大し、基礎・基本の定着を図っていく。
- 学力ステップアップ推進事業を活用し、放課後の

*棒グラフが青梅市、折れ線グラフが全国を示す。
(縦軸：人数の割合、横軸：正答数)

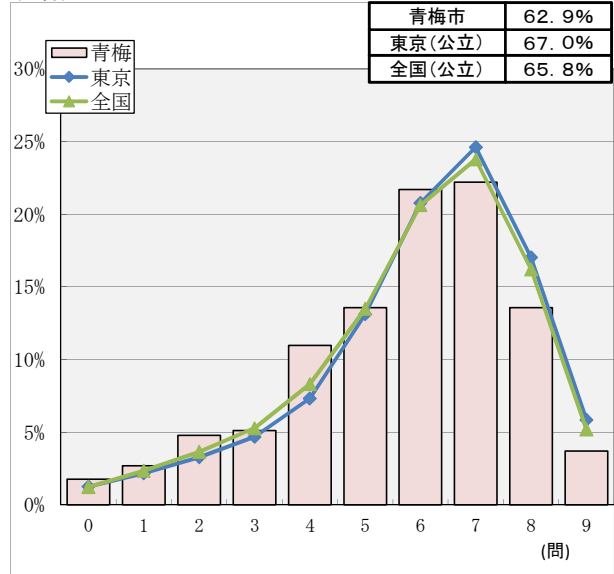
平成27年度「全国学力・学習状況調査」教科別正答数分布(中学校)

平成27年9月 青梅市教育委員会

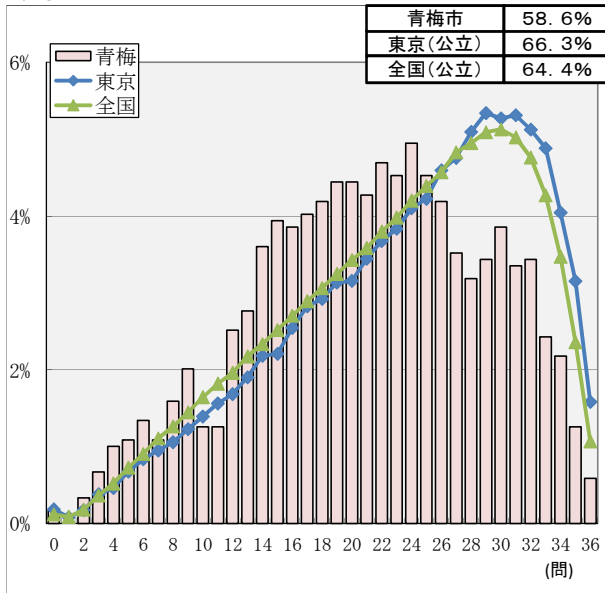
国語A (主として「知識」に関する問題) 平均正答率



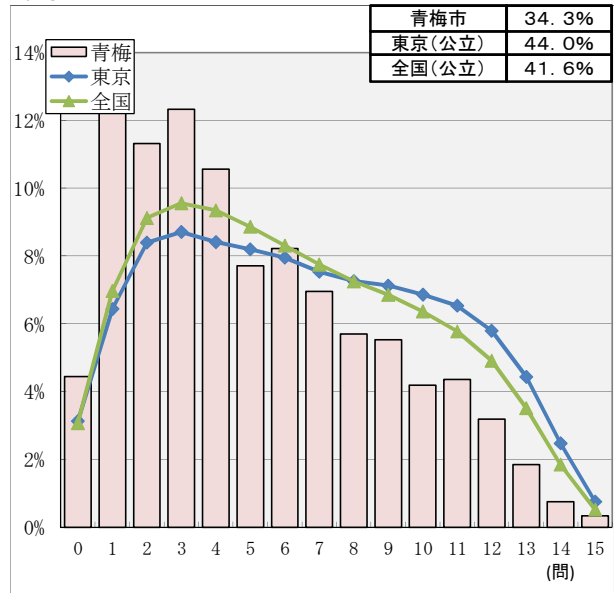
国語B (主として「活用」に関する問題) 平均正答率



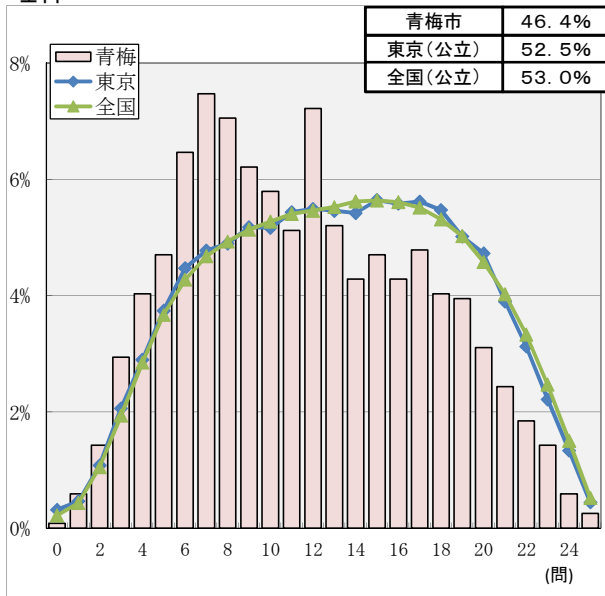
数学A (主として「知識」に関する問題) 平均正答率



数学B (主として「活用」に関する問題) 平均正答率



理科 (主として「知識」に関する問題と「活用」に関する問題を一体的に出題) 平均正答率



<結果の概要>

○ 国語Aにおいて、全国平均正答率を1.9ポイント下回っており、国語Bにおいて、2.9ポイント下回っている。

○ 数学Aにおいて、全国平均正答率を5.8ポイント下回っており、数学Bにおいて、7.3ポイント下回っている。

○ 理科において、全国平均正答率を6.6ポイント下回っている。

<改善策>

○ 学力向上推進委員会において、調査結果の分析を行い、授業改善を図っていく。

○ 青梅サタデースクールを拡大し、基礎・基本の定着を図っていく。

○ 学カステップアップ推進事業を活用し、放課後の

*棒グラフが青梅市、折れ線グラフが全国を示す。
(縦軸：人数の割合、横軸：正答数)